

【氏名】 俵 章浩

【所属大学院】（助成決定時） 東京大学大学院

【研究題目】

イブン・シーナー(980-1037)における pneuma 概念のギリシャ・イスラーム・ヨーロッパの医学思想の伝統への位置づけ

【研究の目的】

本研究の目的は、イブン・シーナーの pneuma 概念の特徴を明確にし、ギリシャ・イスラーム・ヨーロッパの知的伝統の中に位置づけることであった。イブン・シーナーは十一世紀に活躍したイスラーム世界の医学者・哲学者であり、彼の著作は十二世紀以降ヨーロッパにおいてラテン語に翻訳され、中世・ルネサンスの医学思想に多大な影響を与えた。研究の中心となる pneuma とは人間の生命現象を記述する鍵となる概念である。人間の動脈中にあり、生命をつかさどるものとされ、また霊魂と肉体との間において精妙な働きをするとされたものである。この概念は古代ギリシャで生まれ、古代末期に新プラトン主義の下で発展し、イスラーム世界に浸透し変容を加えられ、後にラテン世界でも継承されるものである。人間の生命という謎に満ちた現象に対する、中世の大きな潮流を解明する、ひとつの手がかりを得るという目的のもとに本研究を始めた。

【研究の内容・方法】

イブン・シーナーの pneuma 理論を歴史の中に位置づけるためには、イブン・シーナー以前と以降の二つの側面から見る必要があった。一つは、イブン・シーナーに影響を与えた古代末期の新プラトン主義思想における pneuma 概念の展開である。もう一つは、イブン・シーナーの pneuma 理論のヨーロッパ・ラテン世界に対する影響である。イブン・シーナーの諸作品のうち、考察の対象としたのは、pneuma 理論が展開される『医学典範』第一巻第一部第六教則、『心臓の薬について』の二つの作品である。

イブン・シーナーの pneuma 理論をさらに詳しく見る必要であったため、『心臓の薬について』のアラビア語テキストを丹念に読み返した。特に、星辰の光との結びつきで語られる pneuma の性質について、注意深く読み直すことにし、『医学典範』で語られる pneuma との関連を探ろうとした。

イブン・シーナーに対する古代末期の哲学者の影響としては、多くの新プラトン主義者の名前が候補として上がるが、それらの人物の全てを網羅することは不可能であるため、特に興味深い人物に焦点を絞ることにした。具体的には、イアンブリコス (c. 250-c. 330)

に注目した。イアンブリコステキストにあたり、彼の著作、『エジプト人の秘儀について』で言及される pneuma の概念が、どれほど後のアラブ世界、さらにイブン・シーナーに浸透しているのかを探ることにした。

イブン・シーナーによる影響を見るために、具体的には、一時期にはバルセロナでも活躍した人物、ヴィラノバのアルナルドゥス (c. 1238–c. 1310) の『心臓の薬について』の翻訳活動とその影響について見ることにした。アルナルドゥスの思想にアラブ哲学の影響があることは、以前から指摘されていることだが、イブン・シーナーの『心臓の薬について』の翻訳の結果、そこで見られる光を帯びる精気の理論が、どのように彼の他の著作に現れているのかを探ることにした。

#### 【結論・考察】

まず、『心臓の薬について』を再度、精査した結果、多数見られる星辰の光への言及は、『医学典範』に見られる医学の文脈で語られる pneuma とはいったん切り離して考察することが必要であると思われた。まったく性質の異なる二つの pneuma の関わりを探ることは困難な課題であり、さらに長い研究を要することを認識した。

次に、イアンブリコスの pneuma 概念については、それがアラブ世界に影響を与えていると予想はされるが、実際にどのような経緯で入ったのかは不明のまま残り、具体的に誰のどのテキストに現れるのか見いだすことが今後の課題である。ただ、イアンブリコスの影響が シンプリキウス を通じてアラブ世界に入ってきたのではないかと、いう推測をたてることができた。この線でさらに研究を進めたい。

最後に、ヴィラノバのアルナルドゥスについての研究成果は少なかった。しかし、ヨーロッパにおけるアルナルドゥスの影響は強いため、イブン・シーナーの pneuma 概念の影響の深さを探ることは非常に興味深いことであり、この調査を続けることで実りある結果が得られるだろうと確信した。